

栗田城跡(3)

土木事業代替地先行取得事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1995・3

長野市教育委員会

序

社会生活の変化と共に「物の豊かさ」から「心の豊かさ」が求められる今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできぬ、貴重な国民的財産であると考えます。

特に埋蔵文化財は、直接大地に刻み込まれた歴史であり、当時の物質文化のみならず信仰・宗教等の精神史など、文化の起源をも内包する基準資料であり、埋蔵文化財そのものが歴史・文化を考えるうえでの実証者といえましょう。

このたび土木事業用地代替地先行取得事業にともない、栗田城跡の発掘調査を実施いたしました。

事業予定地周辺は過去の調査で重要な埋蔵文化財が発見されており、古代史研究上注目されていた地域であり、今回の調査でも多大な成果が得られました。

本書はその成果を要約し、長野市の埋蔵文化財第68集として報告するものです。この報告書が地域古代史の解明や文化財保護の一助として、学術的に関係各方面に広くご活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書刊行にいたるまで公私にわたり多大なご援助・ご指導を賜りました関係諸機関ならびに各位に心からお礼申し上げます。

平成7年3月

長野市教育委員会 教育長 滝澤忠男

例 言

- 1 本書は土木事業代替地先行取得事業に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は長野県土地開発公社の委託を受けて、長野市教育委員会が実施した。
- 3 調査地は長野市栗田字東番場561-1他に位置する。
- 4 第Ⅱ章2は市川隆之氏に執筆いただいた。記して謝意を表したい。
- 5 調査によって得られた諸資料は長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）で保管している。
- 6 紙数の都合上、遺跡周辺の地理的・歴史的環境については省略せざるを得なかった。第1・2次調査報告書に詳述されているので参照されたい。

第1次調査 長野市教委1991『栗田城跡 下字木遺跡 三輪遺跡(3)』長野市の埋蔵文化財第38集

第2次調査 長野市教委1994『栗田城跡 (2)』長野市の埋蔵文化財第61集

目 次

序

例言

I 調査経過

- 1 調査の経過
- 2 調査体制

II 調査内容

- 1 遺構
- 2 出土遺物と若干の考察

挿 図 目 次

- 図1 調査地位置図
- 図2 昭和27年修正地形図
- 図3 調査区全測図
- 図4 栗田城の地籍図による復原
- 図5 調査区南端土層堆積状況実測図
- 図6 遺構測量図
- 図7 出土焼物
- 図8 出土土製品・石製品・鉄製品・銅製品

表 目 次

- 表1 出土遺物一覧

I 調査経過

1 調査の経過

周知の埋蔵文化財「栗田城跡」に近接する当該地点において、平成6年7月29日付けで長野県長野建設事務所長より、土木事業代替地に関する埋蔵文化財確認調査依頼が提出された。当埋蔵文化財センターでは、平成6年8月4日に試掘による確認調査を実施のうえ、埋蔵文化財の包蔵を確認し、8月9日付けでその旨を依頼者宛に報告した。

長野建設事務所長から文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づき、平成6年8月18日付けで文化庁長官宛に「埋蔵文化財発掘の通知」が提出され、記録保存のための発掘調査実施が約されるところとなった。

市教育委員会では、発掘調査計画に付いて起因者との協議を重ね、文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づき、8月23日付けで「埋蔵文化財発掘調査の通知」を文化庁長官宛に提出した。

また、8月26日付けで、長野県土地開発公社理事長 小山峰男を委託者、長野市長 塚田 佐を受託者として埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、造成事業において掘削等により埋蔵文化財に破壊の及ぶ可能性の高い道路部分についての、記録保存・発掘調査事業に着手した。

調査は平成6年8月29日に重機を援用した表土除去作業をもって現地における発掘作業の開始とし、9月20日に現場における作業をすべて終了した。現地における発掘作業終了後、室内における遺物整理および記録整理作業に順次移行し、平成7年3月をもって調査報告書編集・印刷を終え、本書の刊行に至ったものである。



図1 調査地位位置図 (1 : 10,000)

2 調査体制

調査主体者	長野市教育委員会 教育長 滝澤忠男	整理作業参加者	徳成奈於子 岡沢治子 池田見紀
調査機関	長野市埋蔵文化財センター		向山純子 西尾千枝 小泉ひろ美
	所長 荒井和雄 主幹 鈴木貞夫	執筆参加者	市川隆之
庶務係	所長補佐 山中武徳	測量委託	俯写真測図研究所
	職員 青木厚子 塚田容子		
調査係	所長補佐 矢口忠良		
	主査 青木和明		
	主事 千野 浩 飯島哲也		
	風間栄一 小林和子		
	専門主事 清水 武		
	専門員 寺島孝典 中殿章子		
	山田美弥子 笠井敦子		
	田中由美子 西沢真弓		
調査参加者	佐々木慶子 高橋 薫 西尾千枝		
	峯村幸一 宮原千治 宮原孝子		
	向山純子 山崎洋子		



調査風景

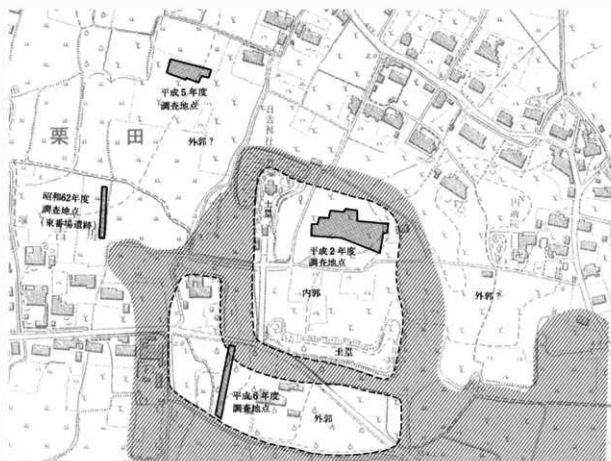


図2 昭和27年修正地形図（スクリーン部分は低地範囲、1：3,000）

II 調査内容

1 遺構

調査地は栗田城跡の外郭部分に相当するものと推定され今回の調査では、2面の遺構面を検出した。出土遺物の検討から、上層の1面は15世紀末から16世紀前半を上限とし、下層の2面は若干の年代幅を持ちながらも、ほぼ14世紀代を前後する時期と推定されている。

1面では土壌4基・溝2本と若干の柱穴が、2面では竪穴状遺構1基・土壌7基・溝2本と多数の柱穴が検出されている。

河西克造によってなされた栗田城の地籍図による復原案（河西1994「3 栗田城の地籍図による復原」『栗田城跡②』長野市教育委員会）によると、栗田城は主郭と外郭が確認され、二重の堀で構成された複郭式の城館で、栗田城の城域は約300m四方の範囲に構成された外郭までとらえられている。

今回の調査区南端は、主郭同様基本的に全周するとされる外郭の堀部分に該当するものと思われ、特に2面ではこの南端部分は包含層ならびに遺構の空白域となる（図3）。しかし、図5の土層堆積状況実測図に示したごとく、調査区南端にては堀の痕跡を示す明確な落ち込みや施設等は確認されていない。外郭の堀はさらに南側に位置することになるのであろうか。土層の堆積状況からは明確な堀の痕跡が確認されていないことよりすれば、外郭の堀は存在せず、むしろ調査区南側に展開する低湿地帯に漸移的に移行する様相も想定される。

いずれにせよ、限られた調査範囲からはいずれも想定の域をでないが今後の調査における課題の一つとして提示しておく。

1面検出遺構

(1) 土壌

SK 1 1.60×1.30mの不整形円形を呈し、深さは平均20cm。出土遺物はない。

SK 2 想定で~片3mほどの隅丸方形土壌と考えられる。深さは1.23mと深く、カワラケ・内耳鍋・白磁皿破片等

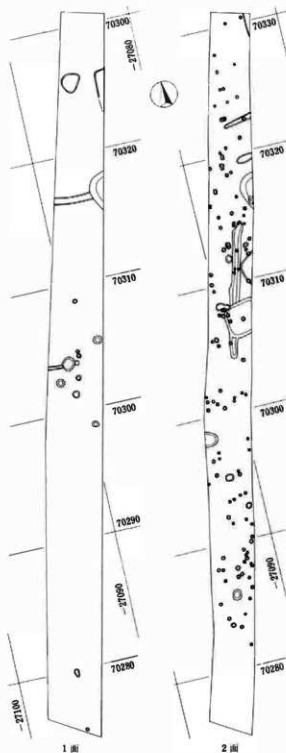


図3 調査区全測図 (1:300)

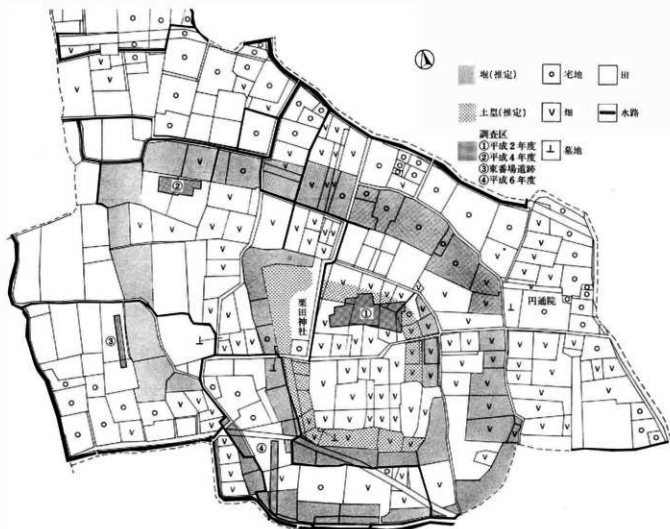


図4 栗田城の地籍図による復原(河西1994に一部加筆) (1:3,000)

比較的多量の土器を出土している。SD1を切る。

SK 3 径70cmの円形土壇で、深さ65cm。カワラケ・常滑甕破片を出土している。

SK 4 径1.05mの円形土壇で、深さ21cm。SD 2を切るが出土遺物はない。

(2) 溝

SD 1 東西方向に直線的に伸びる溝で、SK 2に切られる。確認面での幅は平均50cm前後、深さは平均6cm前後である。出土遺物はない。

SD 2 東西方向に直線的に伸びる溝で、SK 4に切られる。確認面での幅は平均25cm前後、深さは平均5cm程である。出土遺物はない。



図5 調査区南端土層堆積状況実測図(1:80)

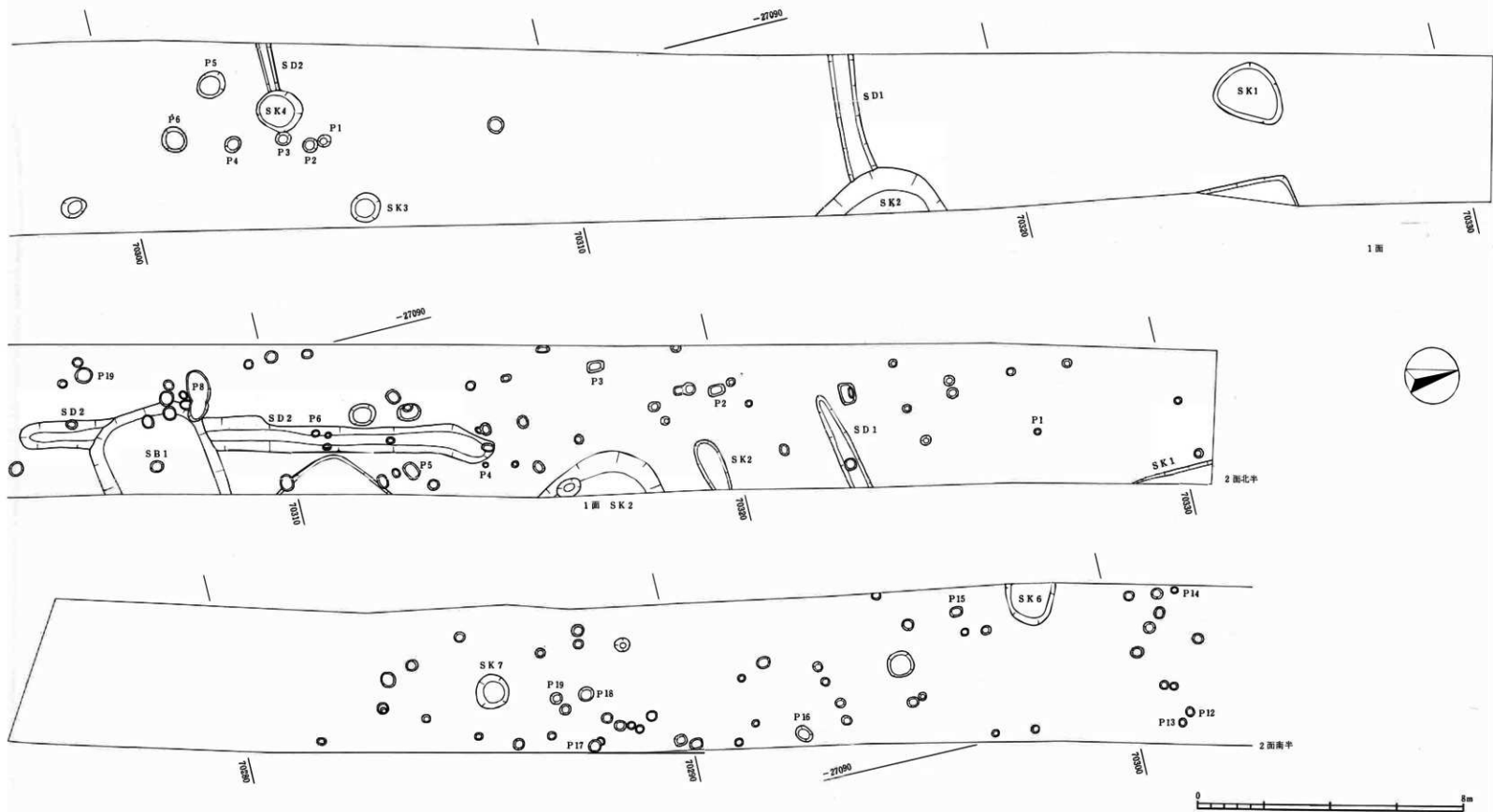


图6 遺構測量図 (1:80)

(3) 柱穴

8本を検出したが、P₁～P₇からは遺物が出土している。調査区中央付近に密集する傾向が認められるが、建物等の痕跡は確認されていない。いずれも基本的に円形の掘り込みである。

2面検出遺構

(1) 竪穴状遺構

SB1 2.80×3.00mほどの隅丸長方形を呈し、深さは平均50cm前後と深い。壁面の立ち上がりも急で比較的しっかりした掘り込みである。中央付近に径30cmほどの柱穴が1本検出されている。床面は地山を掘り込んだままのもので、特別な施設は施されない。北西隅の床面上に炭化物がかなり集中して検出されている。カワラケ・内耳・常滑破片などが比較的多量に出土している。SD2を切る。

(2) 土壌

SK1 調査区北東端で検出したもので、プラン・規模等不明。深さは5cm前後で土師器・カワラケ破片を出土している。

SK2 1.8×0.60mの長楕円形で深さ10cm前後である。出土遺物はない。

SK6 短軸1.10mほどの長楕円形土壌と思われるが、西側は調査区外となり、深さ25cm前後である。内部から20～30cm大の河原石が集積された状態で出土している。カワラケ破片が若干出土している。

SK7 径80cm、深さ20cmほどの円形土壌である。出土遺物はない。

(3) 溝

SD1 東西方向に直線的に伸びるもので、東側は調査区外となる。2.5m程を検出したに過ぎないが、幅は平均40cm、深さは15cm前後である。カワラケ破片が若干出土している。

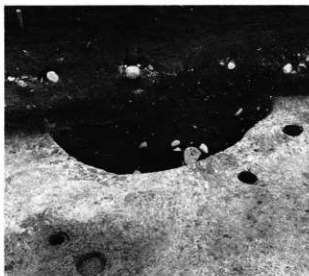
SD2 南北方向に直線的に伸びる形態のものでSB1に切られる。長さ10.8m、幅平均0.80mを測り深さは20cm前後である。溝底から柱穴が若干検出されているが本遺構に直接伴うものか不明である。カワラケ・常滑・須恵質すり鉢破片が比較的多量に出土している。

(4) 柱穴

南端を除き調査区全域にわたって分布し、総数110本が検出されており、この内P₁～P₉より遺物が出土している。建物址として明確な配列関係をとらえたものはないが、掘立柱建物址としてとらえられる可能性もある。円形の掘り込みが主体であるが、方形のものも認められる。



2面 調査区 北半



1面 SK2



2面 SB1



2面 SB1



2面 SB1



2面 SB6



2面 北半

2 出土遺物と若干の考察

編 長野県埋蔵文化財センター調査研究員 市川隆之

(I) 焼物

今回の調査で得られた遺物は全体に摩滅した小破片が多く、総数860点、重量5,302gでテンバコーつにみえない量である。これらは出土地点ごとに種別とし破片数、重量を計算して表1にまとめた。なお、この表での破片数計測は同一固体の可能性があっても直接接合しないものは別に数えている。また、重量計測に関して5g以下は目安で計測し、全体の重量は個別の集計で行なった。以下に図示した遺物を中心として各地点別の出土遺物の概略を述べる。

・2面出土遺物

2面検出遺物は古代と中世遺物で占められる。中世遺物は14世紀前後から15世紀前半の所産と推定される在産土器が主体であり、1点ながら15世紀末～16世紀前半の青磁片が出土している。図示した遺物は1がカワラケ、2が内面に沈線の1条めぐり白磁、3が内耳鍋（すり鉢？）である。3は器壁中央が還元焼成で青灰色を帯びるが、表面は褐色で外面に炭化物が付着する。形態的に類似するものが第1次調査で出土している。

・2面検出遺構出土遺物

ロクロ整形のカワラケがもっとも多いが、SD2の2以外はほとんど小破片である。また、古代遺物は中世遺物と混在して出土している。

- SB1 1～3はロクロ整形のカワラケで、2は明褐色の精選された胎土である。他に常滑甕、内耳鍋小片、古代土器片がある。
- SK2 1は明褐色の精選された胎土のロクロ整形カワラケである。
- SK3 1～2はロクロ整形のカワラケである。他に図示しなかったが、内面は青灰色、外面は灰褐色を呈する常滑甕が出土している。
- SK6 ロクロ整形のカワラケ1点を図示した。胎土は砂粒を多く含む。
- P6 カワラケが比較的多く出土した。図示したカワラケはすべてロクロ整形である。これ以外は須恵質のすり鉢片と古代の土器が出土している。
- P15 ロクロ整形のカワラケ1点を図示した。
- P19 須恵質のすり鉢が出土している。外面はヨコナデを施す。
- SD2 1～3はロクロ整形のカワラケと在産と考えられる須恵質のすり鉢である。須恵質のすり鉢はやや軟質の焼成で外面に雑なヨコナデを残す。

・1面出土遺物

古代から近世までの遺物がある。古代土器はすべて小破片である。中世ではカワラケ、内耳鍋、すり鉢があり、1のカワラケと2の須恵質のすり鉢を図示した。須恵質のすり鉢は検出面採取のものと類似する。近世の焼物は幕末ころのものが多く、3の瀬戸美濃産の碗を図示した。

・1面検出遺構出土遺物

古代から中世の遺物が認められるが、その多くは摩滅したカワラケである。その中でSK2からは15世紀末～16世紀前半の遺物が少量ながら出土し注目される。下面の2面検出遺物中にも同時期の青磁片が1片あり、断定するにはやや躊躇されるが、SK2出土土器は1面の上限年代を示す可能性が高い。その場合、1面検出面や遺構から出土した15世紀末以前の遺物は混入と考えられる。

SK 1 古代の上師器甕片とカワラケ小片がある。

SK 2 比較的内耳鍋片が多い。図示したのは白磁皿とカワラケ、内耳鍋片である。時的には15世紀末から16世紀前半に所属する可能性がある。

P 7 1はロクロ整形のカワラケである。この他に後述する粘土塊が出土している。

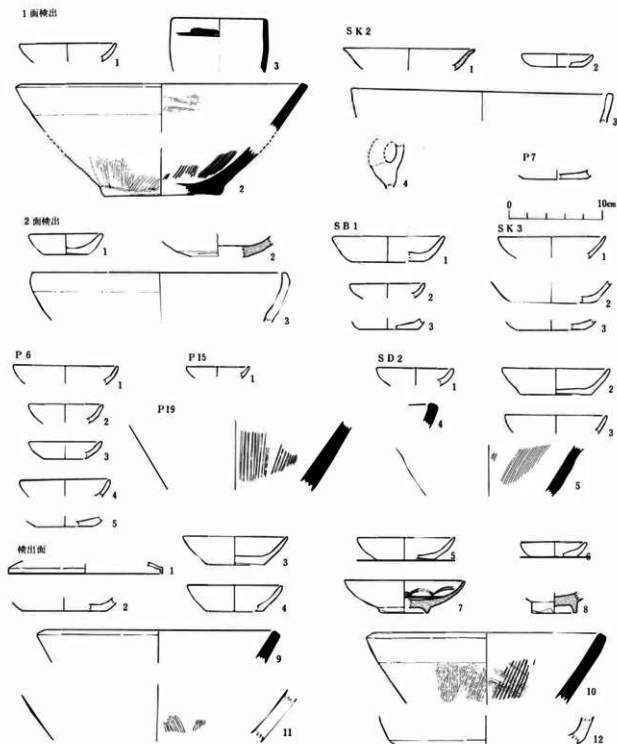


図7 出土焼物(S=1/4) 断面白ヌキは土器、黒ヌリは陶器、スクリーントーンは磁器を示す。

・検出面遺物

排土から拾い出した遺物を含む。古代から近代までの遺物が認められるが、重量的には残瓦片が大部分を占める。1は平安時代の須恵器蓋、2～6はカワラケ、12は丸底と推定される内耳鍋である。9・10は須恵質のすり鉢で、共に焼成は良好、同一固体の可能性もある。10は体部外面下半と内面下部にハケナデ痕が観察でき、在地産と思われる。11は在地産のすり鉢で表面は赤褐色を呈し、一見内耳鍋と類似する。7は近世の伊万里皿で、8は近世以降の青磁碗である。

(2) 土・石・金属製品

土製品には1面P7から出土した土壁破片と思われるものがある。平坦面の裏側には木舞痕と思われる直行する凹面が残る。石製品には検出面から出土した砥石がある。周囲を欠損している。金属製品にはSD2出土の刀子と思われる破片と検出面・2面検出のクギ、石集中から出土した銅銭「寛永通宝」がある。

2 出土焼物のまとめ

(1) 出土焼物の年代と特徴

出土土器は年代的比較により以下のようなまとまりが認められる。そこで各時期毎に特徴を概観する。なお、中世在地産土器の年代については後述する。

- ①平安時代 検出面と中・近世遺構から出土し、基本的に混入と思われる。摩滅したものが多く。
- ②14世紀末～15世紀前 一定量認められる。1面や1面の各遺構からも出土しているが、該期は本来2面検出遺構に対応すると推定される。カワラケがもっとも多く、他に在地産の須恵質すり鉢、丸底の内耳鍋がある。常滑窯も該期に所属する可能性がある。これまでの栗田城各地点の出土遺物と比較するとカワラケが高い比率を占める点は共通するが、全体量自体が少なく摩滅したものが多く、古瀬戸・輸入陶磁器、珠洲製品、石製品がほとんど認められない点が異なっている。また、器種組成で日常的な調理具とわずかな貯蔵具、煮沸具、カワラケはあるが、それ以外の器種が欠落している点も大きな差異として認められる。これは居住者の階層性による可能性もあるが、出土量の少なさも考え合わせると継続的な長期にわたる生活跡ではなかった可能性も考えられる。
- ③15世紀～16世紀前半 内耳鍋と古瀬戸腰折皿、細線蓮弁文碗があり、量は非常に少ない。善光寺平でこの時期の比較資料はあまりないが、卓越した内容とは言えないと思われる。
- ④近世 主に18世紀中頃以降、特に幕末頃から近代が中心で瓦も認められる。

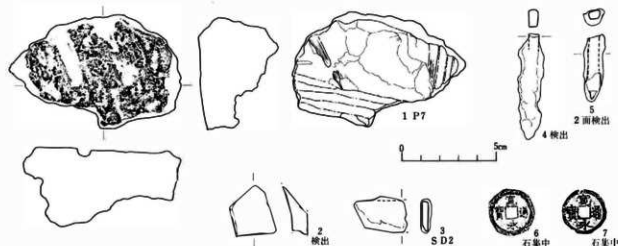


図8 出土土製品 (1)、石製品 (2)、鉄製品 (3～5)、銅製品 (6・7) S=1/2

(2) 在地産土器の年代

今回の調査では在地産土器群が中世遺構の年代を推測する材料となる。しかし、善光寺平での在地産土器群の編年研究は着手されたばかりであり⁽¹¹⁾、また、善光寺平内の地域性の問題も考えられるので、まずは今回得られた在地産土器の年代推定を周辺遺跡との比較で行なうことにする。今回の調査では検出面が2面に分離され、1面については輸入陶磁器や内耳鍋の出土から概略15世紀末から16世紀前半を上限とし、2面はそれ以前の所産と推測された。そこで、出土土器の形態を検討し、他調査の類似形態土器と伴出遺物の検討を合わせ、2面出土遺物を中心に年代を推測してみることにする。

まず、出土量の多いカワラケであるが、すべてロクロ製品で占められ、形態の上では内湾するものと内湾ぎみに斜めに立ち上がるものがある。栗田館の1次調査で得られた遺物には類似品が認められ、2次調査の15世紀前半の陶磁器を伴出したSD2・3ではこの形態が少量である。従って、推測ではあるが、今回出土したカワラケは1次調査出土陶磁器との年代比定と2次調査SD2・3の出土状況から15世紀前半よりさかのぼる可能性が高い。従って、主体は14世紀頃ではないかと推測される。もちろん、形態的なバリエーションが認められるので若干の時間幅をもつものと推定される。

次に内耳鍋である。これまでに栗田城で出土した内耳鍋は非常に少ないが、口縁部は内湾して内面に回転ナデ痕を顕著に残すものと、外反する形態があり、底部は丸底と平底が確認される。口縁部から底部まで接合するものがないことから全体の器形は判然としにくい。今回の調査では2面から内湾ぎみに立ち上がる口縁部破片と検出面から丸い底部破片、SK2からは直立気味の口縁部が出土している。SK2出土のものは伴出遺物から15世紀末から16世紀前半と思われる。一方、丸底の内耳鍋は塩尻市吉田向井遺跡と栗田城の1次調査で出土例がある。吉田向井例は野村氏によって14世紀末と推定されており⁽¹²⁾、このことは栗田城出土陶磁器をみても妥当な年代と思われる。また、外反口縁も同時か、それに続くものと思われる。

最後に須恵質のすり鉢である。口縁部の形態は方形のものと端部が内湾ぎみに立ち上がる2者がある。前者は1面検出例から推測すると体部はハケで整形した後ヨコナデを施し、口縁部外面から内面を丁寧に回転ナデしているようである。底部は砂底である。焼成が良好なので在地産として認めて良いかやや不安もある。後者は体部にハケの痕跡を残さず、ヨコナデの痕跡のみで焼成は軟質である。後者は2面から出土し、類似品は1次調査のSK38、43、45で14世紀後半から15世紀前半の陶磁器と伴出している。また、内耳の焼成に近い内湾タイプが2次調査で出土している。焼成に関し、生産の省力化に伴う還元炎焼成から酸化炎焼成への変化を想定するならば口縁端部が方形のものから内耳質の内湾するものへの変化が予想され、内湾タイプの年代は1次調査例から(14世紀後半?)15世紀前半頃に納まる可能性がある。口縁部の方形タイプは年代を推測するにはもう少し資料の蓄積を待ちたい。以上からカワラケは14世紀代を中心とし、内耳鍋が14世紀末前後、すり鉢は明確な位置を確定しきれないが、14世紀代～15世紀前半と推測される。従って、今回の調査で得られた中世土器の多くは若干の年代幅を持ちながらもほぼ15世紀代を前後する時期と推測する。このことは、1面出土土器との形態的比較と、今回調査の2面推定年代からも矛盾しないものである。

3 出土土器からみた栗田城について

上記の検討をふまえ、これまでの調査で得られた遺物と今回の調査で出土した遺物の比較から栗田城の廃絶と構造に関する問題について述べたい。その前に比較資料となるこれまでの調査での遺物概略を述べておく。

・1次調査 『栗田城跡 下宇木遺跡 三輪遺跡3』1991 長野市教育委員会

出土遺物は少量ながら12世紀後半代の輸入陶磁器が認められ、13世紀後半から多様な焼物が一定量認められ、

14世紀代と15世紀前半は古瀬戸、珠洲、在地産土器を中心として多量の出土遺物が認められる。焼物の種類構成は12世紀後半では輸入青磁、13世紀代では手すくねカワラケ、龍泉窯の連弁青磁碗、青白磁の瓶子、13世紀後半ではカワラケ、古瀬戸卸皿、中津川甕、ロハゲ白磁皿、龍泉窯系連弁文碗などがある。14世紀から15世紀前半では古瀬戸の平碗、天目茶碗、小皿、鉢、瓶子、卸皿、輸入陶磁器では量が少ないものの、口縁部の外反する青磁碗や白磁小鉢、常滑壺・壺、珠洲壺・壺・すり鉢、瓦質火鉢、在地産土器ではカワラケ・内耳鍋・須恵器すり鉢などがある。そしてさらに石臼や石鉢がこれに加わる。出土状況は遺構の切りあいが多いが、14世紀前半以前の遺物は14世紀代から15世紀前半の遺物と混在して出土している。したがって、これらの出土遺物がすべて館の存続期の所産であると断定できない。しかし、遺構分布を見るかぎり、土塁部分の遺構がないので少なくとも14世紀後半から15世紀前半では土塁を巡らせた形態が作られていたと推定される。

・ 2次調査 『栗田城跡 (2)』1994 長野市教育委員会

13世紀代の珠洲すり鉢、13世紀後半の連弁文青磁、ロハゲ白磁皿、14世紀後半から15世紀を中心とする在地産カワラケ・須恵質すり鉢、古瀬戸天目茶碗・平碗・小皿などが出土している。出土遺物の中ではもっともカワラケが多い。焼物種では瓦質製品や常滑、中津川、14世紀後半以降の輸入磁器が認められず、珠洲製品も量や種類が少ない。

上記の各調査例を比較してみる。遺物の年代毎の出土状況では12～13世紀前半の遺物は1次調査で少量出土するが、散在的である。13世紀後半から1・2次調査で一定量認められるようになり、14世紀後半から15世紀前半で全地区に共通してピークがある。以上のことから中心部分がかつても古い段階につくられ、時期をおって順次拡大した可能性も考えられるが、14世紀前半以前のものについては純粋な遺構が抽出できず、館に直接関連した遺物かそれとも館と無関連の集落が偶然重なった結果かは明らかでない。従って、現段階では土塁を巡らせた館に直接関連した遺物は14世紀後半から15世紀前半にかけてのものであると捉えておく。なお、14世紀後半から15世紀前半の土器を地点別に出土量で比較すると1次調査が圧倒的に多く、続いて2次調査、今回の調査と続く。ただし、2次調査はまとめて遺物を出土した3本の溝出土分を除くと非常に少なく、今回の調査と類似する。また器種や焼物種の比較では各地点ともカワラケがかつても多い点は共通するが、地点別の量的な差異はそのまま他の焼物種と器種の差異としても表われている。すなわち、1次調査がかつても豊富に種類が認められ、2次調査分は1次調査と比較する瓦質製品、常滑は認められず、珠洲、古瀬戸も種類や量が限定される。今回の調査ではさらに少なく、古瀬戸製品や珠洲、輸入陶磁器が欠落し、若干の常滑以外は在地産土器群が中心である。

(1) 館の廃絶について

今回の調査で得られた中世焼物は2時期に分離される。この内、2面から主体的に出土した14世紀前後の遺物は栗田城のこれまでの調査で出土した遺物年代に納まるものである。ところが1面のSK2から比較のまとまって出土した15世紀末～16世紀前半に該当する遺物はこれまでの調査では知られておらず、しかも検出面を違えている点は注目される。この検出面の違いと従来の調査で知られていない年代の焼物が出土したことは館の存続年代や館の廃絶年代・廃絶の仕方、あるいは現地表面での痕跡の残り方について様々な問題点となると思われる。ここでは簡単ながらいくつかの問題に触れてみたい。

まず、館の存続年代についてである。今回の調査から15世紀末以後も栗田城が存続していたのかか問題となるが、これまでの栗田城関連の調査で15世紀後半の遺物が欠落するので、現時点では1～2面の間で少なくとも館は廃絶している可能性が高いと思われる。しかし、今日まで残存する土塁規模がこの時期にしては非常に大きく、しかもなぜ土塁や堀が残存していたのかの疑問もある。調査面の違いも含めて今後注意する必要がある。次に館廃絶後の変化に関してである。廃絶時期が先の推測通り15世紀中頃までとすれば、廃絶後も主郭の土塁や堀は現

況にみるように破壊されずに残ったことになる。その一方で主郭周囲はかなり改変が加えられたことになり、館周囲は主郭との空間認識の違いが地域に存在した可能性もある。これらの問題は館の存在時期内での場の意味、さらに館廃絶後の土地の所有や管理の問題なども含めて今後の検討に期待したい。

(2) 館の構造について

これまでに栗田城の全体の形態については方形に堀・土塁を巡らせた主郭を中心に、2重に区画された構造になると推定されている。しかし、これらの検討^{註1}で地表面に残された地割や堀、土塁の痕跡からの復元によるため、中心部分の形態や範囲について見解の一致が得られていても、外縁部の区画や存在や範囲、本当に「回」字状の構造として捉えうるかについては見解の違いもある。また、2重の区画が存在するとしても2重の区画の意味についても検討されていない。この館の構造の問題に関し、発掘調査は部分的でしかも、外縁部については調査が及んでいない限界はあるものの、興味深いいくつかの事項が明らかになってきている。その一つとして、少なくとも14世紀後半から15世紀前半にかけては主郭の周囲に建物や堀が繰り返して構築されている様相が明らかになったことがある。ここでは出土遺物からこの様相について若干検討を加えてみたい。

主郭周囲ではカワラケがもっとも多く出土し、主郭と同一の土器使用のあり方が認められるので、主郭周囲も館との関連で捉えうることは間違いないように思われる。ところが、地点ごとに出土遺物の内容が若干異なる状況が知られる。例えば、主郭部分にくらべて周囲のほうが器種の欠落が見られ、また、カワラケ以外は少ないことから周囲には中心部分に住む人間よりも階層的に下位の者が居住した可能性が高い。また、遺構の面から見た場合、継続的に建物が建て替えられるというよりも、建物が構築された後、溝が構築され、再び建物が作られたりして頻繁に遺構配置が変わっている。これらの出土遺物の少なさや建物の重複状況からすると主郭周囲は下位の者が居住したにしろ継続的に維持される屋敷地が作られていたというよりも頻繁にその様相が変化する場所であったと推定される。このことは今回の調査と2次調査を比較した場合、同じ主郭周囲ながら様相がやや異なると思われることでもうなずける。従って、館は中心となる屋敷と周囲に建物が散在する景観となるが、館の中心的な屋敷地は複数階層を含んで継続して営まれながらも、その周囲は主人よりも下位の者が主人とのつながりにおいて継続性を持たずに居住した可能性も推測される。

最後に上記の推測から提起される問題をまとめておく。上記から栗田城は少なくとも主郭と、周囲の空間を含む範囲と考えられ、主郭周囲は下位の者が配置されるが継続性を持たずに遺構配置は頻繁に変化する場と推測される。この場合、次に問題になるのはこの空間の性格であるが、現時点でいくつか推測をあげておく。先ず、一定の期間に館の主人を中心に同心円状に結集して居住していたことや戦争が起こった場合に臨時の逃げ場であった可能性が考えられる。前者の場合、主郭周囲が館の屋敷地として意識されていたのか、それとも屋敷地内としての意識があいまいなまま、状況に応じて使用可能な空き地を含む空間であったかが問題となる。近年、戦国時代に関しては臨時に立て籠る場合、仮設の建物として竪穴に住んだ可能性が指摘されている。栗田城でも主郭内部屋敷地においてのみ竪穴建物が多数検出されている点からその可能性も考えられるが、主郭周囲ではあまり顕著でないで屋敷内との意識が弱いようにも思われる。しかし、これも最悪の事態が来ない限り、起こらない状況かもしれないので断定はできない。この様相を解く鍵は外縁部を区画する施設の有無とその施設の防衛的な質の問題があるが、これは今後、何らかの機会に明らかにされることに期待したい。

註1 例えば中島庄一「第5章3節1 中世土師皿」『高梨氏館跡』1993 中野市教育委員会がある。

註2 野村一寿「第6章 中世土器・陶磁器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』4

註3 従来の検討については河西克造「栗田城の地籍図による復元」『栗田城跡 (2)』1994 長野市教育委員

表1 出土遺物一覧

面	遺構	破片(重量)	古代	中世	不明	他	
1	SK 2	2(5)	土師1(4)	カワラケ 1(3)			
2	SK 2	50(199)	土師6(32)、須恵1(10)	カワラケ17(16)、内耳鍋12(106)、白磁1(6)	24(19)		
1	SK 3	15(37)		カワラケ 3(3)、常滑 1(15)	11(19)	粘土塊7(219)	
1	P 7	14(243)	須恵1(7)	カワラケ 5(18)	1(4)	銅銭2	
1	石集中						
2	SB 1	66(342)	土師1(31)	カワラケ28(124)、内耳鍋3(14)、常滑 2(15)	23(42)		
2	SK 1	4(27)	土師3(26)	カワラケ 1(1)			
2	SK 3	3(66)		カワラケ 2(17)			
2	SK 6	5(27)		カワラケ 4(16)	1(11)		
2	P 1	5(7)	内恵1(1)	カワラケ 1(1)	3(5)		
2	P 2	11(44)	土師2(22)	カワラケ 3(5)、内耳鍋1(5)	5(10)		
2	P 3	6(17)		カワラケ 3(8)	3(9)		
2	P 4	1(1)		カワラケ 1(1)			
2	P 5	1(1)		カワラケ 1(1)			
2	P 6	29(139)	土師1(7)、須恵1(30)、灰釉1(13)	カワラケ20(74)	5(15)		
2	P 8	1(5)	土師器1(5)				
2	P 9	2(4)		カワラケ 1(1)	1(3)		
2	P 10	1(5)			1(5)		
2	P 11	1(1)		カワラケ 1(1)			
2	P 13	1(4)		カワラケ 1(4)			
2	P 14	1(4)		カワラケ 1(4)			
2	P 15	2(4)		カワラケ 2(4)			
2	P 16	7(11)		カワラケ 1(1)	6(10)		
2	P 17	3(24)				粘土塊3(24)	
2	P 18	5(119)		カワラケ 2(6)、須恵質すり鉢 1(111)	2(2)		
2	P 19	4(6)		カワラケ 1(1)	3(5)		
2	SD 1	4(6)		カワラケ 1(1)	3(5)		
2	SD 2	88(557)	土師 4(55)、須恵 1(11)	カワラケ42(170)、常滑 4(205) 須恵質すり鉢 2(66)	35(50)		
面			古代	中世	近世	不明	
1	面検出	68(499)	須恵 1(6) 土師10(74)	カワラケ10(34)、内耳鍋 4(27)、珠淵? 2(49)、 須恵質すり鉢1(212)	瀬戸美濃碗3(31)、 伊万里碗1(9)、青磁香 炉? 1(1)	36(56)	
2	面検出	114(387)	須恵 3(5) 土師18(73)	カワラケ19(58)、内耳鍋 16(140)、須恵質すり鉢 1(212) 瀬戸産弁文青磁碗1(2)、 白磁碗1(22)		55(86)	釘1(3) 粘土塊1(6)
	検出面	346(2511)	須恵7(141) 土師31(198)	カワラケ81(309)、内耳 鍋3(61) 須恵質すり鉢2(160)、 内耳質すり鉢1(96)、 常滑7(237)、古瀬戸雙 折皿1(2)	瀬戸美濃碗4(11)、在 地産嬰1(6)、染付け皿 1(32)、染付け碗2(4)、 青磁1(57)、瓦12(857)	192 (322)	釘4(28)

(数字は破片数で()内は重量である。尚、SK 2は同一遺構を別検出面で計測した。)

報告書抄録

ふりがな	くりたじょうせき							
書名	栗田城跡 (3)							
副書名	土木事業代替地先行取得事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第68集							
編著者名	千野 浩 市川隆之							
編集機関	長野市教育委員会 (埋蔵文化財センター)							
所在地	〒381-22 長野市小島田町1414 長野市立博物館内 Tel 0262-84-0004							
発行年月日	1995年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
栗田城跡	長野市大字栗田56 1-1他			36度 37分 59秒	138度 45分 20秒	1996年8月 30日～9月 20日	300	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
栗田城跡	城館	中世	整穴状遺構、溝、土壇、 柱穴					

長野市の埋蔵文化財第68集

栗田城跡 (3)

平成7年3月25日 印刷

平成7年3月30日 発行

編集 長野市教育委員会

発行 長野市埋蔵文化財センター

印刷 日本平版印刷